DOI 10.18995/24344710.9.191

研究交流会報告

「人形愛」から「推しを語るわたし」へ

～現代文学にみる新しい性愛のかたち～

助川幸逸郎

Transformation from Agalmatophilia to Interpreting about my Favorite

～ New Eroticism of Contemporary Literature～

SUKEGAWA Koichiro

1. はじめに

文化社会学部の先生がた、はじめまして！　といいたいところなのですが……そんなセリフをいまさら口にするのも照れくさい感じがします。20 年以上前から、非常勤講師として、文学部日本文学科の授業を担当。文化社会学部でも、映画関連の授業をもたせていただいていました。現代教養科目をやっていた時期もありました。

あまりにいろんなネタで授業をするので、「先生の専門はなんですか？」と学生さんに不思議がられます。特撮映画、アニメ、ファッション、源氏物語、村上春樹……たしかにわたしの講義内容は、節操がないと映るかもしれません（笑）。

当人としてはいちおう、つぎの三つを研究の柱にしているつもりです。

⑴　『源氏物語』をはじめとする、中古・中世文学の今日的意義を追求する。
⑵　現代文学の分析をつうじて、これからの日本社会のあるべき姿を考える。
⑶　サブカルチャーの発展可能性を、伝統文化とのつながりという観点から検証する。

今回は、これら三つの要素すべてが入りまじった、幅のひろい――といえばきこえはいいですが、見方によってはカオスな――お話をさせていただく予定です。おおまかな進行としては、

「『源氏物語』と川端康成作品に共通する性愛のありようを確認」

↓

「そのような性愛の姿が、時代のみならず地域もこえることを、オスカー・ココシュカの画業を通して検証」

↓

「それらと類似しているようで、根本的に異なるあたらしい性愛のかたちを、綿矢りさや宇佐見りんのテクストから取りだす」

といった流れを予定しています。

2.『源氏物語』の薫と「人形愛」

見える「かをり」から匂う「かをり」へ

『源氏物語』の続編の主人公・薫は、世間的には「光源氏の次男」ということになっています。ところが実際は、光源氏の正妻である女三宮が、柏木と密通して生まれた「不義の子」なのです。

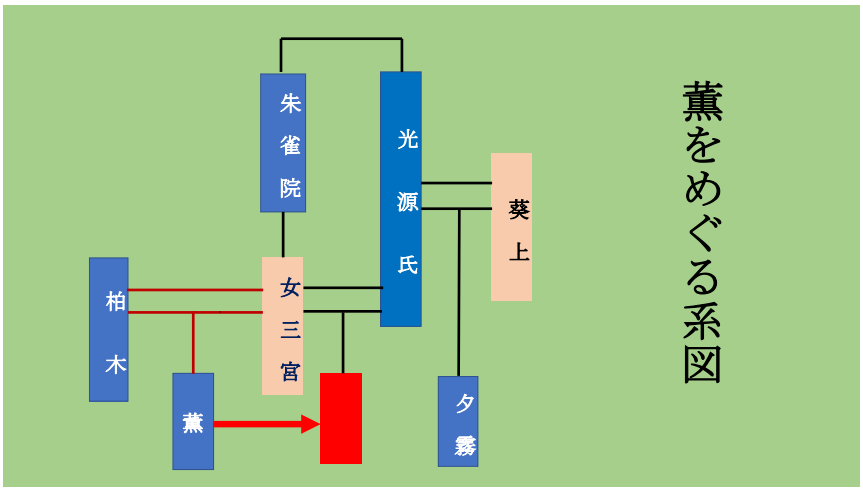

図１（作成　助川幸逸郎）

みどり子のころ、光源氏や夕霧の視線をとおして、薫は「まみのあたり」が「かを」っているとくり返し語られます（この場合の「かをる」は「煌びやかな視覚的美しさをたたえている」の意）。

（１）この君、いとあてなるに添へて、愛敬づき、まみの（あ）かをりて、笑みがちなるなどを、いとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、（い）眼居ののどかにはづかしきさまも、やう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。（柏木　６巻２９９頁）[i]

（２）眼居など、これは今すこし強うかどあるさままさりたれど、（い）まじりのとじめをかしうかをれるけしきなど、いとよくおぼえたまへり。口つきの、ことさらにはなやかなるさまして、うち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ、大殿（助川註・光源氏

のこと）はかならずおぼし寄すらむと、いよいよ御けしきゆかし。（横笛　６巻３３７～３３８頁）

引用文（１）は、光源氏からみた幼時の薫。（２）は、夕霧の目をとおした「生まれてまもない彼」です。目の近辺が「かを」っていること。そしてそれが柏木を彷彿させるとともに、この世ならぬ美しさの源泉になっていること。この二点が、いずれの引用文においても語られています。実父の特質を引きつぎつつも、柏木のレベルをはるかに超える超絶美形。それが「みどり子のころの薫」です。

ところが。成人後の薫は、まったくちがうタイプのキャラクターになってしまいます。

（３）顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよら、と見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしうはづかしげに、心の奥多かりげなるけはひの、人に似ぬなりけり（匂兵部卿　６巻１７０頁）

ああ綺麗！　と思わせるきわだったところはないひと。でも、思慮ぶかそうな雰囲気があるのでりっぱにみえる――それが「大人になった薫」なのです。もはや彼は、超絶美形ではありません。柏木の血を引く刻印であった「まみのあたりのかをり」についても、成人してからはまったく言及されなくなります。

そのかわり、大人の薫には、幼時にはなかったある特質がそなわっています。からだの芳香です。それは、百歩はなれていても嗅ぎあてられるぐらいきわだったものでした（電車で隣に立たれたらちょっと迷惑かもしれません……）。

「「まみのあたり」の「かをり」の喪失」

「幼時にはなかった体香の顕現」

このふたつが、成人後の薫の身に並行して生じています。これらは何によってもたらされたものなのでしょうか。わたしはつぎのように考えます。

薫の実の父は柏木ではないか。薫が生まれたばかりのころ、光源氏と夕霧はそう疑っていました。「罪の子」として生まれたからこそ超絶美にかがやく。この「闇深きゆえに光をおびる」という論理が、「おさない薫」にこの世ならぬ美しさを付与していたのです。

薫が成人した段階で、光源氏はすでに他界。夕霧もなぜか、薫が大人になると、薫の出生をまったく疑わなくなります（その理由については、まだあきらかにされていません）[ii]。幼時にはあらわになっていた「出生の秘密」が、成人後に潜在化した。こうした「罪の転移」を象徴するのが、「まみのあたりのかをり」の「体香」への変換だった[iii]――そんなふうにわたしは考えています。

じっさいには、体臭や口臭がきついわけではないのに、「じぶんは異臭を放っている」という強迫観念にとりつかれる。そういう精神疾患があります。この「自己臭恐怖症」とか「自臭症」とかよばれる病いは、

「じぶんの内奥に隠れている欠損や恥」

が、いつのまにか他人につたわってしまう恐怖を背景にしているそうです[iv]。彼の「体香」が、

「隠された出生の秘密」に関連しているとしたら――薫のキャラクター設定は、自己臭恐怖症と構造的に通じていることになります。これはたいへん、興味ぶかい事実ではないでしょうか。

「自我理想」としての宇治大君

正編の主人公・光源氏と異なり、薫は女性を真剣に愛することがなかなかできません。そんな彼が、はじめて心から恋したのが、宇治八宮家の長女・大君です。

「思ふやうに、かをりをかしげなり」――期待したとおり、「かをり」がすばらしい。　それまではっきりとみることができなかった彼女を、まぢかで目にした瞬間、薫はそういう感慨をもちます（総角　７巻２２～２３頁）。みずからが失った「視覚にうったえるかをり」。それを薫は、大君に求めていたのです。

大君の父・八宮は「宮家の体面をまもるため、並たいていの男と結婚するな」と遺言していました。このことばを、彼女はおもくうけとめます。結果、

「父亡きいま、わたしと妹の中君を支えてくれる親族はいない（大君の母は、中君の出生時に亡くなっています）。じぶんたち姉妹が、ふたりとも家柄にふさわしい結婚をするのは無理だろう。しかし、わたしが独身をつらぬき、妹の後見に徹すれば、まっとうな縁組ができるかもしれない。薫は「並たいてい」のレベルをはるかに超えた相手だから、彼と中君を結婚させて、わたし自身は人並みに生きるのはあきらめよう」

――そんなふうに考えるようになっていました。「父」を背負うことにより、現世で報われる道をみずから閉ざす。そういうキャラクターとして、大君はえがかれているわけです。

「父」と「栄達」のあいだで引き裂かれる。その悩みが、薫を特徴づけています。彼は、じぶんがほんとうは柏木の子であることを知っていた。そのことを公言するなら、「光源氏の子」であるがゆえにいま、享受している特権を手放すしかありません[v]。いっぽう、このまま秘密をたもって生きつづければ、執政者として、貴族社会の頂点をきわめることも夢ではない。けれども、そんなふうに権力を手にしても、それは畢竟、「いつわりの人生」です。

「父」と正面から向きあい、真実の生をあゆむ代わり栄達をあきらめるか。権力を手にするために、「父」の問題から目をそむけたままでいるか。薫は、このふたつの挟間で苦しんでいます。そういう彼にとって、大君は「じぶんが選びきれない生きかたをいさぎよく選びとったひと」。「こうありたいと願うじぶんの像」を体現した「自我理想」です。

薫は大君を、「生身の他者」というより「昇華されたじぶん」として愛していたといえます。大君は、じぶんを実物より美しく映す「うぬぼれ鏡」のようなものだったわけです。

薫のこのような性愛のありかたは、女性の「偶像化≒人形化」につながるものといえます（生身の女性ではなく、女性に映しだされた「じぶんの願望」を愛するわけですから）。そして薫は、大君と死にわかれたのち、そうした性癖をいっそう露わにしていくのでした。

「自我理想」崇拝から「人形愛」へ

中君との結婚を提案された薫は、匂宮を中君のもとに導きます。中君がしかるべき配偶者を

得れば、大君がじぶんを受けいれるだろうと考えたのです。けれども、大君の態度はゆるぎません。そして、匂宮が中君をないがしろにしていると誤解した大君は、その苦悩から病いを得て、亡くなってしまいます。

大君が他界してまもなく、今上帝の女二宮と薫の結婚話がもちあがりました。

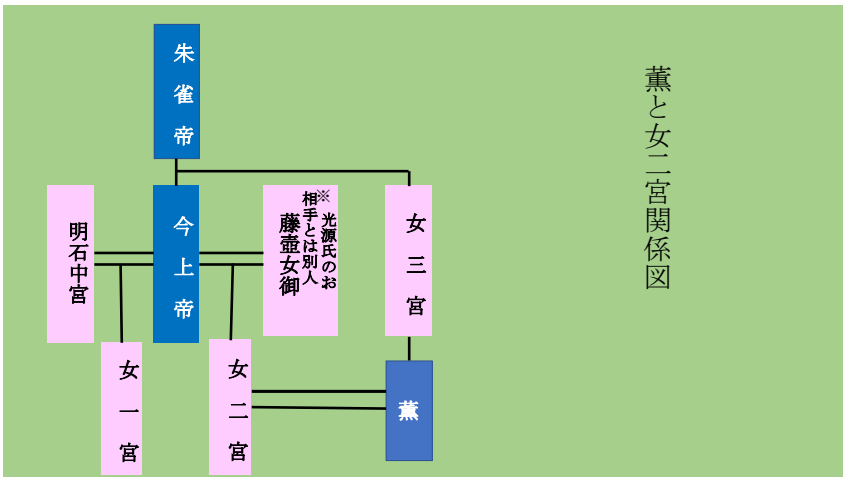

図２（作成　助川幸逸郎）

薫はこの結婚を受けいれ、「在位中の帝の婿」という破格の地位を手にします [vi]。もはや、薫の栄達をさえぎるものはありません [vii]。

いっぽうで薫は、「大君を偲ぶよすが」となる「人形（ひとがた）」を、執拗にもとめます。そして、大君の異母妹・浮舟を、「生身の大君人形」に仕立てあげようとくわだてるのでした。

さらに、「どうせなら、女二宮より格上の、女一宮とも結婚したい」という「大それた望み」まで抱く始末（女二宮の母は女御で、女一宮は中宮の子。母の身分が重いぶん、おなじ皇女といっても女一宮のほうがより高貴なのです）。女一宮の姿をかいまみた翌日には、前日に女一宮が着ていたのとおなじ衣装を、女二宮に着せようとしたりします [viii]。薫にとって女二宮は、たしかに「トロフィー・ワイフ」です。しかし、ほんとうに「トロフィー」としてしか彼女をみていない！　なんだか、読んでいるこちらのほうが落ちつかない気持になってきます。

大君に恋をしていたときの薫は、「純朴な青年」といえなくもありません。これに対し、浮舟や女二宮とむきあう彼は、「俗物」そのもの。この隔たりを、「薫は物語が展開していくにつれて堕落した証し」とみなす意見もあります [ix]。わたしは、この説には与しません。女性を「自我理想」として崇めるかまえと、人形あつかいする態度。両者は、正反対のようで根はおなじです。「おのれの欲望」を投影する鏡として相手をみる点で、「自我理想」崇拝と「人形愛」は変わりません。薫は、そのことをしめす恰好の「症例」といえます。

3.「自我理想」におぼれる近代日本文学の男性キャラ

「自我理想」崇拝と性的接触

薫のようなタイプの性愛は、日本の近代文学にもみとめられます。たとえば、川端康成作品の男性登場人物たち。彼らのほとんどが、女性にむけるまなざしという点で薫と同類である。わたしはそのように考えています。

もっともわかりやすい例が、『みづうみ』の銀平でしょう。彼は、女子校の国語教師だったのに、教え子のストーカーになって馘首された男です。若い美女をみかけると、追いまわさずにいられない性癖をもっています。

銀平は、美少女をひたすら眺めるだけで、性的接触を積極的にのぞむようなことはありません。「**美少女の瞳のなかで泳ぎたい**」。それが銀平の究極の欲望です[x]。

美少女のなかに宿る、「昇華されたじぶん」に焦がれる。そういう性愛を生きる銀平にとって、性的接触はむしろ忌避すべきいとなみです。銀平は、おのれの醜さを嫌悪しながら美少女をみつめつづけ、じぶんが浄化される瞬間を夢想します。彼にしてみれば、「昇華されたじぶん」は、「生身のわたし」と隔絶しているからこそ尊いのです。

三島由紀夫は、『綾の鼓』という作品にこんな一節を書きつけました[xi]。

「恋といふものはさういふもんじやない。おのれの醜さの鏡で相手を照らすもんだ」

これは、七十歳になる老人・岩吉が、おのれの恋について語ったセリフです。まるで、銀平の口から発せられたようではありませんか。美しい相手に、遠くから「自我理想」を投影する。そういう性愛のありかたに、ある程度の一般性があることを、銀平と岩吉の類似は物語っています。

『痴人の愛』の譲治とのちがい

銀平は「醜いじぶん」に苦しめられていました。薫も、「罪の子」として生まれた悩みを抱えています。そういう「損なわれた現状」から解放されることを夢みて、じぶんと遠く隔たった相手に昇華された自己を投影する――それが、薫や銀平や岩吉の「生存戦略」でした。

みずからの願望を生身の女性に体現させようとする。ヘテロセクシャルの男性には、大なり小なりそういう傾向があります。とはいえ、たとえば谷崎潤一郎がえがく『痴人の愛』の譲治の愛欲は、銀平や岩吉とは明らかに別ものです。彼はナオミを理想の女性に育てあげるために結婚し、かえって彼女の「奴隷」にされてしまいます。譲治も、じぶんの理想を生身の女性に押しつけようとしている点、薫や銀平とかわりません。しかし、譲治はナオミを妻にして、深いかかわりをもとうとする。さらに、ナオミの「反撃」をうけていいようにされてしまうのですから、『痴人の愛』のカップルの関係は相互的です。恋しい相手とどのようにかかわるか。その具体的なかたちにおいて、遠くから対象を眺めるだけの銀平と、譲治のあいだには無視できないちがいがあります。

谷崎は、『源氏物語』の現代語訳を三度も手がけました。このため、この物語に共感し、文学的にも影響をうけたというイメージがひろまっています。ところが実際には、谷崎はむしろ、『源氏』をきらっていたようです。彼は晩年、右腕に故障をきたし、口述筆記をおこなっていました。つぎに引用するのは、この口述の際、作家に代わって文字を記していた伊吹和子の証言です。

（4）私の見た先生は、よほど光源氏という人物が気に入らぬ様子でした。一番ご機嫌が悪くなるのは、『細雪』を『源氏物語』になぞらえて何か言われたり、下鴨の 潺潺亭（せんかんてい） を六条院にたとえられたりした時でした。「京都の人は僕に、先生も御殿のような家に暮らして光源氏になった気分でしょうだの、奥様は紫の上のようですねだのと、時々そんなことを言う、源氏をよく読んでいないからだ、そのたびに腹が立って仕方がない。あんな嘘つき男と一緒にされちゃお終いだね、光源氏はすぐにお体裁の涙を流して見せたりして、何というイヤな奴だ、僕は大嫌いだよ、付き合うのは御免だ。」と吐き捨てるようにおっしゃるのを何度か聞いたこともありました[xii]。

女性を「自我理想」崇拝と「人形愛」の対象にする。この点で、光源氏は薫や銀平とかわりません[xiii]。

谷崎がもとめていた性愛は、『源氏物語』にえがかれたタイプのものとはちがっていました。王朝物語を代表するこのテクストからエロスの相を引きついだのは、川端であり、三島だったのです。

4. オスカー・ココシュカと「人形愛」

「じぶんを捨てた女性」のフィギュアと暮らした男

薫の愛欲のかたちが、時代をこえたものであることは、ここまでの考察で確認できました。では、「薫のように女性を愛する男」は、海外にもいるのでしょうか？

20 世紀の初頭からなかばにかけて活躍した、オスカー・ココシュカという絵描きがいます（1886～1980）。彼は、アルマ・マーラー（著名な作曲家であるグスタフ・マーラーの元夫人）と恋愛関係にありました。しかし、第一次大戦に出征しているあいだに、アルマは建築家のヴァルター・グロピウスと結婚。この事件は、受けとめきれないほどの衝撃をココシュカにあたえました。傷心のあまり彼は、女流造形家のヘルミーネ・モースに依頼して、「等身大アルマ人形」の作成をこころみます。

「さわった快楽」を得ることに挫折して「銀平化」

ただし、ココシュカが「アルマ人形」もとめたのは、「離れて眺めるからこそ意味を持つ、理想自我のスクリーン」ではありません。モースに宛てた制作指示書には、「アルマ人形」の触感についての要求がくわしく書かれています。「お願いですから、さわった快楽があるようにしてください。脂肪と筋肉の層を追いかけていたとおもったら急に、それを覆うふわふわの皮膚を感じたよろこびがほしいのです」[xiv]。ココシュカが「アルマ人形」にもとめたのは、「美的な眼差しを向けるのに必要な心理的距離を無効にし、触覚によって直接官能性訴えかけるようなフェティッシュ」[xv]でした。

結局、「アルマ人形」は、ココシュカの心の欠落を埋めるには至らなかったようです。ココシ

ュカは、この「等身大フィギュア」と数年をともにしたのち、みずからの手で破壊します。「アルマ人形」と訣別すると、すぐれた肖像画家であったココシュカは、このジャンルに以前ほど意欲をしめさなくなりました。そして、およそ10年を経て、彼はふたたび「他人の姿」を描く熱意をとりもどします。

ただし、「帰ってきた肖像画家・ココシュカ」は、作風を一変させていました。新生ココシュカの手になる肖像は、モデルより画家じしんに似ていたのです（かつては「モデルがもつキャラクターに対するするどい洞察」で名をはせていたというのに）[xvi]。「アルマ人形」から「さわった快楽」を得ることに挫折して、ココシュカは対象に「自我理想」を投影しはじめた。すなわち、「理想を受肉させた人工物」と現世で一体化することに限界を感じ、「銀平化」した。そんなふうにいえるのではないかとおもいます。

5. 現代文学にみる「女性の欲望のあたらしいカタチ」

これまで語られてきた「女性の欲望」

性愛の対象を、「自我理想」を託すスクリーンにする。時代や地域をこえて、そのような志向が男性にみとめられることは、これまでであきらかになりました。では、女性はどうなのでしょうか？

「女性である」とは、「本質をもたないこと」、「みずからの本質がいかなるものか、確信をもてないこと」――精神分析の観点から、ジャック・ラカンはそのように主張しました[xvii]。彼がただしいとすれば、「銀平のような女性」は存在しないことになります。「人形」に投影すべき本質を、女性はもたないわけですから。そのかわり、当人にもわからない本質を教えてくれる男性を、女性はもとめるのではないか。ラカンの理論を敷衍するなら、そういう推測がなりたちます[xviii]。

じっさいさいきんまで、「本質を教える男性」が、女性むけのコンテンツでヒーローの座を占めていました。すこしふるい例としては、『エースをねらえ』で岡ひろみをみちびく宗方仁とか、『アラベスク』でノンナの隠れた才能を掘りおこすユーリとか。こうした傾向は、洋の東西を問いません。たとえば、『キルビル』のビルは、そういう「憧れの男性像」をパロディ的に受肉させたキャラクターではないか。そうわたしはみています。パロディにされるぐらい、ハリウッドにおいても「本質を教える男性を女性が崇拝」という図式は一般的だったのです。

『蹴りたい背中』における「欲望の性転換」

ところが、上にのべたような「性愛の基本型」からはみだすヒロインを戴く小説が、近年の日本文学には増えています。

たとえば、綿矢りさの『蹴りたい背中』(2003)。オリチャンというアイドルに萌えるおたく男子・にな川と、ヒロインのハツ。ぼっち高校生ふたりの、奇妙な交流をえがいた作品です。

ハツは、にな川に恋をしているというより、欲望を感じています。彼女がにな川にむけるまなざしは、異性愛男性が女性をみるときの それ そのものです。

（5）「痛。」桃を食べたにな川が、顔をしかめた。
「どうしたの。」
「桃の汁が唇に染みる。乾燥している唇の皮を剝いたんだった。」
鼻がつまって口呼吸をしているせいか、にな川の唇は乾燥してひび割れていた。さぞかし、染みるんだろう。唇に親指をあてて眉をしかめている彼を見ていたら、反射的に口から言葉がこぼれた。
「うそ、やった。さわりたいなめたい、」ひとりでに身体が動き、半開きの彼の唇がかさついている所を、てろっと舐めた。血の味がする。[xix]

風邪で学校を休んだにな川もとへ、ハツは桃をたずさえてやってきます。上に掲げたのは、そのくだりからの引用です。にな川のくちびるに「傷」があるのをみて、ハツは興奮し、反射的にそこをなめます。こうした感じかた――対象の「傷」によって欲望をかき立てられる――は、異性愛男性に特有のものとされてきました。斎藤環はいっています。「われわれが女性の表層に惹かれるとき、われわれは自分を魅了するものが、当の女性の目に見えない本質なのだと信じようとする、（中略）ここで言われる「女性の本質」なるものが、実は「外傷的」なものに等しいということ。われわれが女性の外傷にこそ魅了されるということ、それを示す痕跡は、大衆文化の中にいくらでも見出される」・「「傷ついた女性」は、まさにその外傷性ゆえに愛されるのだ」[xx]。

女性の心身の「傷」に、「昇華されたおのれの欠損」をみる。そういうかたちで「銀平的欲望」があらわれるケースがある。斎藤はそう指摘しているわけです。

ハツは、クラスで孤立しているじぶんの「傷」を、にな川のくちびるにある「傷」に投影しています。そうして、にな川の「傷」をなめることでみずからをなぐさめる。にな川にむかうハツは、完全に「銀平の同類」です。

「脚」を「存在理由」にするハツ

作品のタイトルにもなっているとおり、にな川の背中を蹴りたいという欲望をハツは抱いています。

ふるい昔から「脚」は、男性の性的な力の象徴です[xxi]。ハツは陸上部に所属し、「走ること」を好んでいます。そして、にな川となかよくなったきっかけは、オリチャンとことばを交わした経験をつたえたからでした。三年まえ、ふたりが住む町を、雑誌の撮影のためオリチャンはおとずれました。駅まえの無印良品にオリチャンは立ちより、中学一年生だったハツはその姿をみかけたのです。このときハツはオリチャンから、「君の脚、いいね。すごく速く走れそう。引き締まってる」とほめられています。脚を「誇れるポイント」とし、欲望の対象を蹴りたいとねがう――この点からみても、ハツの性愛は「異性愛男性」にちかいのです。

さきほどの「キスシーン」のあと、ハツは友人の絹代とにな川と三人で、オリチャンのライヴに参戦します。会場は、たくさんのオリチャン・ファンであふれていました。じぶんが one

of　them にすぎないことを痛感し、はげしく落ちこむにな川。その哀れな姿をみて、ハツは奇妙な興奮を胸にたぎらせます。

（６）こんなにたくさんの人に囲まれた興奮の真ん中で、にな川がさびしい。彼を可哀相と思う気持と同じ速度で、反対側のもう一つの激情に引っぱられていく。にな川の傷ついた顔がみたい。もっとかわいそうになれ。

ここでもハツが萌えているのは、「にな川の傷」に対してです。彼女の「銀平度」は、半端なものではありません。

「ひとりの男性をひたすら愛している女性」は、多くの男性に好感をもたれます。虚構作品に出てくるそのたぐいの女性キャラも、男性ファンの人気はたかい。これに対し、ある女性をひたすら追いかけて、しかも受けいれられない男性はどうでしょうか。現実でも虚構作品でも、女性から笑いものにされるケースが多いのではないでしょうか[xxii]。「オリチャンに一方的に入れあげて、挫折するにな川」にひかれるハツは、女性としては異例のタイプなのです。「女性を愛でる男性のごとく」にな川に萌えるハツ。そうした逆転の構図が、この部分にもはっきりみてとれます。

「推し」をとおして「わたし」と出逢う

実質のない「像」におのれの理想を投影する――男女かかわりなく、アイドルをおいかけるファンには、程度の差こそあれ、そうした傾向がみとめられるはずです。宇佐見りん『推し、燃ゆ』(2020) は、そんな「アイドル崇拝者」を主人公にすえて話題をあつめました。

ヒロインのあかりは、どうしても環境になじむことができません。バイトをしても失敗の連続。高校も留年して、中退を余儀なくされる。彼女のゆいいつの救いは、じぶんと同質の不器用さを抱えるアイドル・上野 真幸（まさき）をウォッチングすることでした。彼を分析することで、あかりはままならない「じぶんみずから」を理解しようとします。

おのれの欠損を愛の対象に投影する。この点において、あかりのしていることは薫や銀平とおなじです。ただし、「傷を共有する女性」にむかう男性は、相手のなかの「昇華されたじぶん」をみて始終、恍惚としています。真幸を観察するあかりの目は、異様なまでに明晰です。あかりは、真幸の言動を分析してはブログにアップします。そこに記された内容は、日ごろの不器用さからすると信じられないほど要を得てシャープ。たくさんの真幸ファンに読まれている様子です。

あかりにとって真幸はどのような存在なのか。真幸のライヴに折の述懐に、それがはっきりとわかるくだりがあります。

（７）推しを取り込むことは自分を呼び覚ますことだ。諦めて手放した何か、普段は生活のためにやりすごしている何か、押しつぶした何かを、推しが引きずり出す。だからこそ、推

しを解釈して、推しをわかろうとした。その存在をたしかに感じることで、あたしはあたし自身の存在を感じようとした。推しの魂の躍動が愛おしかった。必死になって追いつこうとして踊っている、あたしの魂の躍動が愛おしかった[xxiii]。

中学生二年生のころ、わたしはマーラーの第九交響曲にはまっていました。暇さえあればLPレコードをターンテーブルに載せ、ディスクを鳴らしていないときでも、間断なくこの曲が頭に響く。われながら、気味がわるいほどの中毒ぶりです。そしてわたしは、マーラーを聴きながら、「推し」をみるときのあかりとおなじことを感じていました。

思春期にある楽曲を、ある小説を、ある漫画を好きなる。そういう場合、「推し」に接するあかりに似た精神状態になるひとは、わたしにかぎらず多いはずです。とすると、「推し」への熱狂は、いかなる意味でもあかりを現実の関係にみちびかないことになります（マーラーの第九交響曲が、実在する人間との恋愛につながらないように)。あかり自身、そのことにじゅうぶん自覚的です。「携帯やテレビ画面には、あるいはステージと客席には、そのへだたりぶんの優しさがあると思う。相手と話して距離が近づくこともない。あたしが何かをすることで関係性が壊れることもない。」

『蹴りたい背中』のにな川は、オリチャンと特別なあいだがらになれるのでは？　と夢想します（アイドルに熱狂する男性は、こうした惑乱状態に陥りがちです)。真幸を推すあかりに、このたぐいの盲目性はみじんもありません。

6. 恋愛から遠く離れて

「レスポンス不要の性愛」を生きる

真幸とのあいだに現実の関係は生じない。そのことを、あかりは「優しさ」と呼んでいます。彼女にとって真幸は「手のとどかない王子」ではない。「触れられないからこそ尊い存在」です。

銀平も岩吉も、生身のじぶんと隔絶していることを「愛の条件」にしていました。けれども彼らの「究極の願望」は、恋しい相手との一体化です。そこのところが、「推しに萌えるあかり」とは根本的にちがいます。

あかりと同様、ハツの性愛も自己完結的です。かりに、にな川とハツがカップルになったとしましょう。傷口をなめまわす、背中を蹴りとばす――ハツの「性暴力」に、にな川が耐えきれるかどうか疑問です。銀平はストーキングの対象を、当人の主観としては崇拝していました。ハツはにな川を、ペット同然にもてあそんでいるようにも映ります。

身体レベルからの「性差の変容」

社会的にたかく評価されている男性から、どこまでの庇護をひきだせるか――それが「女子力」を測るモノサシになる。バブル世代以前の女性のあいだでは、そういう考えかたが一般的でした。この価値観は、ここ20年ぐらいでどんどんマイナー化する傾向にあります。

男女雇用機会均等法の施行など、社会体制の変動がこのながれをもたらした。わたしもそれを否定する気はありません。ただ、ひとりひとりの身体レベルのところで、性差の組みかえが

起きているような気もするのです。

現在の既製のメンズパンツは、ブランドによっては、ウエスト60㎝代後半に対応した商品を用意しています[xxiv]。わたしが大学生のころ、そのレベルでほそい男性は、まわりをみまわしてもわたしひとりしかいませんでした(笑)。足のかたちも、いまの男性はかつてより幅がほそく、甲がうすい「貴族風」です[xxv]。

いっぽう女性のウエストは、ふとくなる傾向がうかがえます。女性の体型そのものは、この40 年あまりでスリム化がすすんでいる。つまり、「肥っていないのに、くびれていない」タイプがふえているようなのです[xxvi]。

ハツやあかりはおそらく、こうした「性差の組みかえ」を背景にうまれてきたキャラクターです。彼女たちの愛欲の姿は、現代女性が意識だけでなく身体においても変化しつつある事実の反映である。わたしはそんな風に睨んでいます。

「彼氏」より「仲のいいクラスメイト」をえらぶ

若い女性が、男性からの承認をえることに存在証明をもとめなくなった。ならば、彼女たちは、性関係を主体的にたのしもうとしているかというと、それもちがうようである[xxvii]。ハツもあかりも、相手と「関係」をむすんでいる感じが希薄なのです。

住野よるの『君の膵臓をたべたい』(2015) では、膵臓の病いのため余命がかぎられている桜良と、「僕」の交流がえがかれます。興味ぶかいことに、「僕」と桜良は最後まで「恋人同士」にはなりません。じぶんに誠実に寄りそってくれる「僕」のことを、桜良は「仲のいいクラスメイト」くん、と呼びます。桜良の「元彼」というのが出てくるのですが、彼は「桜良のことをまったく理解していない、最低の粘着男」です(「桜良につきまとうな！　」といって、「僕」のことを殴ったりするのですから)。

「性的関心の対象にしたり、されたりすると、相互的な関係をもつことができない」

『蹴りたい背中』や『推し、燃ゆ』とはべつのかたちで、『君の膵臓をたべたい』はそのことを語っているのではないでしょうか。「恋人」になるよりも「仲よし」のままでいるほうが、相手の「他者性」と向きあえる[xxviii]——そういう認識が、ひろく共有されつつあることを、同時代小説の秀作を読むごとにわたしは実感します。

7.「他者体験」としての文学授業へ～まとめにかえて～

以上、想定したとおり——というか、想定をこえて——カオスなお話をしてきました。性的なことがらに、他人を巻きこまない。その種の問題には、じぶんひとりで対処する。これが「標準モラル」になりつつあることは、おわかりいただけたのではないかとおもいます[xxix]。

昭和のころにひととなったわたしと、現代の若者では、恋愛に対する感覚が根本からちがうのです。となると、すこしまえに書かれた「多くの共感を呼んだ小説」が、まったく理解されないという事態が生じてきます。たとえば、村上春樹の『風の歌を聴け』(1979) のつぎのような一節。

（8）鼠の小説には優れた点が二つある。まずセックス・シーンが無いこと、それから一人も人が死なないことだ、放って置いても人は死ぬし、女と寝る。そういうものだ。[xxx]

人間が死ぬのは例外のない真理です。これと「女と寝ること」を並置されたら、いまどきの大学生は目をまるくすることでしょうか。男性はだれしも、女性とベットインしたがる――わたしがこの小説をはじめて読んだ八〇年代には、「一般常識」としてそれがまかりとおっていたわけですが。

「多様性」や「他者の包括」が、現代の大学教育の重要な課題になっています。もしかしたら身体レベルか「他者」になっている学生さんたちと、恋愛小説を読む――そこのところに、「恋愛小説」をいま、授業でとりあげる意義があるのではないか。教員であるわたしが「他者」である学生さんたちと出逢う。学生さんたちも教員との交流をつうじて「他者」がいかなるものであるかを実体験する。そういう相互的な学びの場を、これから組織していくのがわたしの目標です。

---

i 『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成版による。

ii この問題については、近日中に別稿を発表する予定。続篇世界の政治情勢に強いられて、夕霧は薫を「実の弟」としてあつかわざるをえないのだ、とわたしは考えている。

iii この点については、助川幸逸郎「〈見えるかをり〉／〈匂うかをり〉―薫の〈かをり〉が表象するもの―」（三田村雅子・河添房江編『薫りの源氏物語』翰林書房　2008）でも論及した。

iv 岡野憲一郎『恥と自己愛の精神分析―対人恐怖から差別論まで―』（岩崎学術出版社　1998）

v たとえば、光源氏と藤壺のあいだに生まれた冷泉院は、世間が不審におもうほど手あつく薫を庇護する（匂宮　6巻165～166頁）。表むきは桐壺帝の子である冷泉帝は、薫という「弟」を引きたてることで、実父・光源氏にむくいようとしたのであった。柏木の子であることを知られたら、薫は冷泉帝の支援をうけられなくなる公算がたかい。

vi 史実をみると、平安時代になってから『源氏物語』の成立までに、皇女と臣下が結婚した例は11例。このうち、「皇女の父帝が在位中」であった例はひとつもない。

vii 今上帝が、女二宮の婿に薫をえらんだのは「じぶんの妹である女二宮の子」だからであった。実父がだれであれ、薫の母が女三宮だという事実はゆるがない。また、皇子のいないまま引退した冷泉院より、長男をすでに春宮の地位につけている今上帝のほうが影響力はつよい。女二宮の降嫁を受けいれたことで、薫の「挟間に置かれた苦悩」は、ほぼ解消されたことになる。

viii 蜻蛉　8巻148頁。

ix 山田利博「負性を帯びた主人公として」（『源氏物語の構造研究』新典社　2004）など。

[x] 川端康成全集 18 巻 74 頁参照。
[xi] 三島由紀夫『綾の鼓』(『近代能楽集』新潮社　1956)。引用は「決定版　三島由紀夫全集２１巻」(新潮社) による。
[xii] 伊吹和子「谷崎潤一郎」(『めぐり逢った作家たち』平凡社　2009)
[xiii] この点については、助川幸逸郎「眠れる美女にこがれる薫〜源氏物語と川端文学が共有する「エロスの構造」〜」(河野喜美子ほか編『中野幸一卒寿記念論集』勉誠出版　2023) で詳述した。そこでは、川端の『眠れる美女』にみえる性愛の構造と、光源氏および薫のありかたが通底する点にも言及している。
[xiv] ココシュカがムーアに宛てた 1918 年 8 月 20 日付の書簡にみえる記述。
Oskar Kokoschka: *Brife I　1905-1919*　(Dusseldorf, 1984)
[xv] 古川真宏「肖像としての人形」(『芸術家と医師たちの世紀末ウィーン』みすず書房　2021)
[xvi] 注 16 に挙げた書での古川の指摘による。
[xvii] ジャック・ラカン『アンコール』(藤田博史・片山文保訳　講談社　2019 ※原著 1975)
[xviii] この点については、助川幸逸郎「夜神月は、死んで「新世紀の神」となった」(『文学理論の冒険』東海大学出版会　2008) で詳述した。
[xix] 『蹴りたい背中』の引用は、河出文庫版による。
[xx] 斎藤環『戦闘美少女の精神分析』(太田出版　2000)
[xxi] たとえば、ソフォクレスの『オイディプス王』。「父を殺し、母をおかす」という神託をうけて生まれたテーバイの王子は、生まれてすぐ、踵に傷をつけて捨てられる。ひろわれた彼は、両足が腫れていることにちなんでオイディプスと名づけられる (「オイデン＝腫れた」+「プースー＝両足」＝オイディプス)。ここにおいて「脚に傷をつけること」は、「性的パワーを奪うこと＝去勢」の喩となっている。フロイトも、脚が男性器の代補となることを指摘する (「フェティシズム」『エロス論集』中山元訳　1997)。
[xxii] 小谷野敦は、『定本〈男の恋〉の文学史』(勉誠出版　2017)」でいう。「近世文藝では、それこそ『八犬伝』の犬塚信乃と浜路のように、追いすがるのは女の役割であり、男は冷酷にこれを振り払って旅立ってしまうのが通例であり、美しいとされる。いまでも、多くの女性作家はこういう男女関係の描き方を好んでいる。」
[xxiii] 『推し、燃ゆ』の引用は、単行本初版 (河出書房新社) による。
[xxiv] たとえばユニクロのネット通販サイトでは、ヌードサイズでウエスト 66 ㎝の男性にむけたパンツが売られている。
https://www.uniqlo.com/jp/ja/products/E453365-000/00/size?sizeDisplayCode=002 (2022 年 12 月 23 日閲覧)。いっぽうで、日本の男性の平均的肥満度は増加の傾向にある (本川裕『なぜ、男子は突然、草食化したのか 統計データが解き明かす日本の変化』(日経新聞社　2019)。総じて先進国では、男性の肥満度は上昇している。日本人男性は、そうしたながれにしたがいながら、骨格そのものは華奢になりつつあるのだとかんがえられる。
[xxv] 山陽山長のホームページの「木型相関図」参照。近年のモデルほど「ウエス

トを絞りこみ、甲がうすく、踵が小さく」なっていることがわかる。
http://www.sanyoyamacho.com/collection/last/　（2022 年 12 月 23 日閲覧）

xxvi 注 24 にあげた本川によると、日本人女性の肥満度はこの 40 年あまりでゆるやかに低下している。が、『anan』第 101 号（1974 年 6 月）で「ウエスト 64 以上のゆたかな体型がかっこいい」という特集が組まれており、ウエスト 60 ㎝代なかばは 70 年代当時、「ふくよかなからだ」とみなされていたことがわかる。いっぽう現在、ユニクロで売られているレディスのパンツの M サイズは、ヌード寸法で 63 ㎝から 69 ㎝、S サイズが 60 ㎝から 66 ㎝。
https://www.uniqlo.com/jp/ja/size/416978_size.html（2022 年 12 月 23 日閲覧）2022 年のいま、ウエスト 64 ㎝の女性はむしろ「細身」なのである。

xxvii たとえば、2022 年にノーベル文学賞を受賞したアニー・エルノーは、『シンプルな情熱』（堀茂樹訳　早川書房　1993　※原著は 1992）などで、主体的な性関係をもとめる女性をリアルにえがいている。紙数の都合で具体的に引用はできないが、相手の様子をどれだけこまかくながめ、それによってどれだけじぶんの精神がゆれうごいているかを比較するだけでも、ハツやあかりと、エルノーの「私」のちがいはあきらかである。

xxviii 『君の膵臓をたべたい』における他者性については、土田知則「『君の膵臓をたべたい』――僕とは正反対の彼女物語の始まり」（『他者の在処: 住野よるの小説世界』小鳥遊書房　2020）でも論じられている。

xxix 「銀平のような欲望」をかかえる男性は、依然として存在する。『魔法少女まどか☆マギカ』は、2011 年に最初のテレビシリーズが放映され、現在でもゲーム、劇場版アニメなど派生作品の制作がつづいている。この作品に登場する魔法少女は、主人公のまどかをのぞき、深刻な心の傷をかかえている。その「傷」にじぶんの欠損を投影する男性視聴者は多い。ハツやあかりのような女性と、銀平のような男性のあいだに、セクシャルな関係がうまれることは想定しがたい。

xxx 『風の歌を聴け』の引用は、講談社文庫版による。